

小学校教師による小6社会科“世界の中の日本の役割”の教材研究—1枚の写真を通して

赤道直下の国、エクアドルの森林（中）

作成：矢野越史（やの えつし／兵庫県家島町立家島小学校 教諭）

寸評：山下宏文（やました ひろぶみ／京都教育大学 教授）*

語り：「これはエクアドル共和国の高山にある森林地帯の写真です。木はたくさん切られてしまい、ほとんど残っていません。写真を見て、どう思いますか。これは「森林破壊」ですよね。地球温暖化にもつながっているかもしれません。どうですか。「こんなことはいけない」と思いませんか。このように、地球上の木がどんどん切られて、毎年広大な面積の森林がなくなっているのです。

しかし、本当にいけないことなのでしょう。少し違った見方で見てみましょう。この国では料理をするためのガスはなく、薪まきでごはんを作っています。また、寒い日には薪を暖炉あかにくべたり、夜には灯りあかりを得るために薪を燃やしたりもしています。薪はエクアドルの人々の生活のために、必要不可欠なものなのです。これがないと、エクアドルの人々は生活できないのです。だから、日本人が「森林破壊だ、木を切るな」と言うと、彼ら



▲ある伐採地の風景

の生活は大変なことになるのです。

一方で、エクアドルの木は外国にも輸出されています。良質で高く売れる木は家具や建材として、外国に売られているのです。国内で使う木材よりも輸出用木材のほうが多く、エクアドルの森林は減少し続けています。木材や鉱物などを先進国に売って、お金を手に入れるしか方法がないのです。そのため、それらのものが国民に回ってこないで、国民の生活が脅かされるという事態も起こっています。これがまた問題なのですが。」

意図（矢野）：世界には、裕福な国（先進国）や貧しい国（開発途上国）があることを知り、日本は先進国に属していることを理解する。そして、開発途上国の生活を知ることを通して、現在の私たちの見方や考え方が、そうした国々ではそのままでは通用しないことに気づかせたい。さらに、「南北問題」や「国際援助」、「国際協力」にまで発展させて、日本が行っている活動などを調べながら、将来、自分たちは何ができるのかを考えるきっかけとしたい。

寸評（山下）：前回（8月号）に引き続き、「エクアドル共和国の森林」に関して教材作成をお願いした。小学校第6学年の国際理解の学習において、「南北問題」の扱いは、難しい要素を多く持っている。しかし、具体的な事例を通して具体的に扱っていけば、小学生にもこの問題について考えさせることは可能である。開発途上国の森林の問題は、「南北問題」を具体的に考えるためのよい教材になりうるのではないだろうか。日本の森林だけではなく、世界の森林をどのように守っていくかということは、教育が絶えず持ち続けなければならない観点である。